

さんしゃ Zapping

Vol.36 No.2 (通巻 200号)

2021年12月

＜産社学会 ニュースレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186

E-mail: s-kyoken@st.ritsumeai.ac.jp

<http://www.ritsumeai.ac.jp/gss/research/newsletter/>

〔 目 次 〕

＜追悼 遠藤保子先生＞

- | | | |
|--------------------|-------|-----|
| 遠藤保子先生を偲び、ご厚情に感謝する | 有賀 郁敏 | p.2 |
| 遠藤保子先生を偲んで | 仲間 裕子 | p.5 |
| 遠藤先生のご冥福を祈る | 山下 高行 | p.7 |

＜自著紹介＞

- | | | |
|-----------------------------------------------------|-------|------|
| 権学俊著『スポーツとナショナリズムの歴史社会学 —戦前=戦後日本における天皇制・身体・国民統合』 | 権 学俊 | p.9 |
| リム ボン（著）『研究者への道 —学術論文の執筆方法 に関する—考察—』 | リム ボン | p.12 |

＜学部共同研究会報告＞

- | | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|------|
| 「他領域で社会運動研究の論文を刊行するには？」 “How to publish the article of social movements in different research areas?” 開催報告 | 富永 京子 | p.15 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|------|

＜エッセイ＞

- | | | |
|----------------------------------------------|-------|------|
| 「混迷の祭典」とメディアー 新聞やテレビは東京オリ ピックをどのように扱ったのかー | 有賀 郁敏 | p.18 |
|----------------------------------------------|-------|------|

< 追悼 遠藤保子先生 >

遠藤保子先生を偲び、ご厚情に感謝する

有賀 郁敏



故 遠藤保子先生

生をいつも「保子さん」と呼び（ちなみに遠藤先生は私を有賀さん）、年配の先生の中には「やっちゃん」と親しげに語りかけていた方もいて、遠藤先生は誰からも好かれていた。

確か教授会の日々の会議室だったように記憶しているが、着任の挨拶にたった先生は「身体表現論」を主担当科目とする教員らしく、私にはその意図がよくわからない即興的パフォーマンスをされ、会議室に居合わせた並み居る教員を笑いのるつぽに誘った。「やるな、遠藤さん」。これは当時の私の率直な感想だが、このパフォーマンスを苦々しく眺めていた教員は、おそらく誰一人いなかっただろう。

*

誰からも嫌われる人はいるが、誰からも好かれる人を見つけることは難しい。このシンプルな命題に対し、私は迷わず遠藤保子先生を後者に位置づけたい。少なくとも、私は遠藤先生を悪く言う人に出会ったことがない。私は遠藤先

お茶の水女子大学大学院で学ばれた遠藤先生は舞踊学の泰斗、松本千代栄教授の学説を独自の論理で再構する優秀な弟子だったように思われる。中井正一の浩瀚かつ難解な哲学に着想をえた松本理論

を踏まえつつ、遠藤先生は欧米を軸にした従前の身体表現論の領野を越境し、京都の伝統的な踊りからアフリカの民族舞踊にウイングを広げていくことになるが、この思い切った身体論への嚮導は、先生の学問的関心からすれば必然だったと私は考えている。

また、E.ホブズボームを精緻に探究された先生は、伝統の正統性（創られた伝統）を対象化しつつ、しかし伝統から派生する新たな身体（表現）の可能性にも着目していたように思われる。この点は新しい学問の僥倖を告げるものであり、先生が舞踊学会にとどまらずスポーツ史学会、スポーツ人類学会の理事を務められた背景には、先生の学問的広がりや学知の豊かさを物語るものである。アフリカから数多の舞踊研究者が遠藤先生との交流を求めて来日したが、その理由は先生がいわゆるオリエンタリズム、ましてやポストコロニアリル的な思想に与せず、かの地で紡がれる身体表現の多様な価値と誠実に向き合い、寄り添い、評価し、そして共鳴しようとした心からであろう。このことは簡単なことではない。

*

私は2011年4月から6年間、学部長・研究科長の任あり、産社50周年記念式典をはじめ教授会の先生や職員の方々から多くの支援を受けた。その間、遠藤先生には目立たないが極めて重要な役回りをお願いしている。詳細をはぶくが、その中には遠藤先生だからこそ、否、遠藤先生でしか担っていただけないような難儀な事柄もあった。当時の学部長として先生のご苦勞に対し、あらためて心から感謝の意を表したい。なぜ、遠藤先生だったのか。それは先生が親切だからということもあるけれど、役割の意義をしっかりと認識され、しかも先生独自の能動的な思想を付与していただけたからであり、この主体性があるからこそ、学部長として信頼して先生に役割を担っていただいたのである。与えられた課題を自身の考えや思想に照らし、その重要性を理解し、主体的・能動的に向き合う。こうした厳しい態度はフレンドリーな先生の人となりからはにわかに想像しにくいのが、先生の凛とした姿勢が揺らぐことはなかった。

ちなみに、先生は大学・法人の方針であっても、それが道理に背くものであれば、平仄を合わせるようなことをされなかった。

*

遠藤先生のゼミ要項には、ゼミに来てほしい学生の資質として「変な人。面白い人」と書かれてある。いかにも先生らしい記述と言えそうだが、しかしゼミ要項になかなか書けることではない。先生にとっては、この記述は学生の人気をかすめ取ろうという手練手管の類ではなく、すべての学生に対して先生の学問の扉は開いているという教員としての真摯なメッセージだったと、私は思っている。卒業式の謝恩会の舞台上で学生たちが踊るように、遠藤ゼミには面白い学生が少なくなかったが、学問に対しては真摯な態度であった。先生のご指導が反映していたのだろう。学生が安心の距離感をもち教員と切り結ぶことができるゼミ、それが遠藤ゼミだった。

*



遠藤先生がご体調を崩されて以降も、授業日でお会いた際には常にこやかに対応していただいた。仄間の限りでは、先生は年配の名誉教授の健康を心配されていたという。他者を心から慮ろうとする先生らしい一面である。

先生は今でもかの地（世界）で舞踊学、歴史学、人類学を探究されておられるのではあるまいか。「有賀さん、ここにも面白い人たちがいて、わいわいしているのよ」と。きっとそうであるに違いない。ならば、私も先生に自信をもって応答できるように教員として誠実であり続けなくてはならない。「保子さん、今年のゼミにこんな面白い学生がいるよ、大切に育てますね」と。

遠藤先生、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしく申し上げます。

(2021年8月30日)

遠藤保子先生を偲んで

仲間 裕子



ニューヨーク大学B.J.ライ教授と(2000年9月)

遠藤保子「アートマネジメントと大学カリキュラム」『マルチメディア時代に対応した総合芸術のファカルティディベロップメント研究：基盤研究（B）成果報告』2002年

1994年に遠藤保子先生とともに産業社会学部に就任して以来、27年の月日が経ちましたが、先生の明るく、ユーモアを欠かさず、また気配りを大切にされ、誰にでも好かれる天性はまったく変わることがありませんでした。

電車通勤の際に交わした日常的な会話から、研究や仕事の相談まで、遠藤先生はいつも気軽に話し合える親しい友でもありました。共同研究を実施できる機会にも幾度か恵まれました。遠藤先生が代表者の「マルチメディア時代に対応した総合芸術のファカルティデ

ィベロップメント研究」(科研基盤研究B、1999～2001年度)では、コロンビア大学、ニューヨーク大学、ラトガーズ大学、南カリフォルニア大学、ロサンゼルス Getty センター、サイモンフレイザー大学、カールスルーエの芸術・メディアセンター(ZKM)、リンツのアルス・エレクトロニカ、ベルリンのART+COMを共に訪ね、今日のメディアアートの可能性を、あるいはアートマネジメントの実情、オルタナティブスペースの活用を見学調査し、専門家とのパーソナルコミュニケーションを重視するというスケールの大きい内容でした。このように、遠藤先生の研究の発想は刺激的で、並外れた行動力をつねに尊敬していました。

なにより、時代に敏感で、異文化への熱い思いが研究を支えていたのではないかと思います。研究領域は日本舞踊からアジア・アフリカの民族舞踊まで幅広く、2005年にナイジェリア国立舞踊団員を招待し、立命館大学アートセンターにおいて、ナイジェリアの伝統的舞踊をモーションキャプチャーによってデジタル記録するなど、今

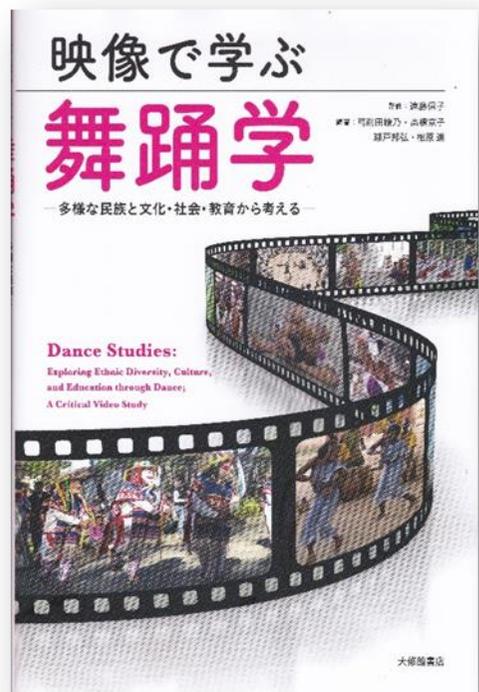
日の技術も積極的に投入し、教育にも活用できる最先端な方法を実施されていました。

遠藤先生が舞踊研究の第一人者であることは周知の事実ですが、高橋京子さん、相原進さん、そして野田章子さんを筆頭に後継者を育てられたことも素晴らしい業績でした。2020年3月に出版された『映像で学ぶ舞学—多様な民族と文化・社会・教育から考える』（大修館書店）は、これまでの蓄積をすみずみまで反映させた舞踊研究の集大成です。この若手研究者たちとともに編集されている点も、遠藤先生にとって特別な本であったと思います。しかも、QRコードを利用して映像資料やデジタル教材を特設サイトから視聴できる画期的な本なのです。「おわり」に記された遠藤先生の以下の言葉から、この本について語ってくださった時の、満面の笑顔を思い出します。

「仲間と共に世界（欧米以外）の多様な舞踊に関する書物が出版できたらいいな、と、私は研究室の机に頬杖を突きながら何度も夢見ていた。そして今、その夢がかなった！感無量である。夢ではないわ

よね、と思わず頬をつねったこともある」。

推理小説が好きで、料理や整理整頓が上手で、每日一時間必ず歩いていた遠藤先生。心から感謝しています。この長い月日をご一緒できたことはとても幸せでした。



遠藤保子監修『映像で学ぶ舞踊学』
大修館書店、2020年

遠藤先生のご冥福を祈る

立命館大学名誉教授

新日本スポーツ連盟附属スポーツ科学研究所副所長

山下 高行

遠藤先生は大学の一年か二年先輩にあたり、当時から有名人であったからうっすらとその存在は覚えている。しかし初めてお話しできたのは私が立命館大学に赴任しての二年目、日本体育学会という会員数が6千人であったか、巨大な学会の大会を引き受けたときであった。もちろんこんな大きな学会は立命館単独で開催することは力量的に困難であったから、京都のいくつもの大学の協力の下に行くことになった。遠藤先生はその援軍で京都教育大学から駆けつけていただき、その時から立命館にも私にも縁の深い方となった。

と言うのも遠藤先生とお話しすると直ちに私の姉を連想させるほどどこか似ていて、特に江戸言葉で言えば「気っぷのいい」ところなどそっくりで、いつも姉と接している気にさせていただいていたものである。特に怖くて頭の上がない姉のイメージのほうであるが。その姉が立命館に赴任することとなり、ついこの間と思っていたのがもう何十年ともなった。

思い出すといろいろなことをお話ししたし、教えてもいただいたが、特に先生のホームグラウンドであったアフリカの話がもちろん多くて、アフリカのレストランだとかで出る象やシマウマのステーキの話は、まるで私もアフリカに行ったかのように悦に入ってお聞きしていたものである。またエチオピアの歌舞演劇団のお話などは、ホズボームの「創られた伝統」という言葉を思い起こさせて、いろいろ勉強になったことを覚えている。

しかし私にとって一番思い出深いのは、私が大動脈解離という大変な病気で入院していたときの話である。この病気、場所を間違えたら致命傷というものであったが、幸い外れ、後は直しようがないので自然治癒しかないということで、病室で一ヶ月も悶々として過ごすこととなった。

そんなある日ひょっこり遠藤先生が訪ねてこられ、恐縮していたら、話を聞くと丁度その時に遠藤先生も隣の日赤病院の方に入院しておられ、そこから来たと言うこ

とがわかり驚くこととなった。遠藤先生は皆さんもご存じのように大変明るく、ユーモアの絶えない方であるが、実はその底の部分には悲しさを持っている方だなあと良く感じさせられていた。

おそらくいつかお聞きしたご親族の不幸のことだろうかといつも考えていたが、このときはご自身のことだった。このときが今の病魔の始まりだったようだ。私もその数年前にも別の心臓の病で大きな施術を受けており、以来、生死感というものを徐々に考えていくようになった。いやなに、難しい哲学とか宗教からではなく、誰しもそうだと思うが日々の暮らし全てから考えていくようなものだ。なんとなく話すと遠藤先生もそれを探し始めているように感じたので、お聞きすると「そうだ」と言われる。それで丁度家から持ってきていた

韓国映画の傑作と名高い『八月のクリスマス』のDVDを差し上げることにした。いつか学校で出会ったときにその話になり、「寂しい映画だったわねえ」としみじみと言われていたのが印象的であった。あまりに近いお話なので、その後ずっと呻吟していたのだが、何かを感じたのかなあと少し思わせてくれた。誰しも行かざるを得ない途だからなあとはい思うのだが、そんなわけで戦友のような気がして、連絡は取らなかったけれど、ここ何年も折に触れては考えていた。訃報をお聞きして、またどこかで「先輩いかがですか」と映画の感想なども続けたいと思っている。またお会いしましょうというのも変な言葉かもしれないが、「先輩」楽しい人生でしたね、とお声をかけたいと思う。ご冥福を心からお祈りしたい。



出所) 八月のクリスマス [DVD]

販売元 : キングレコード

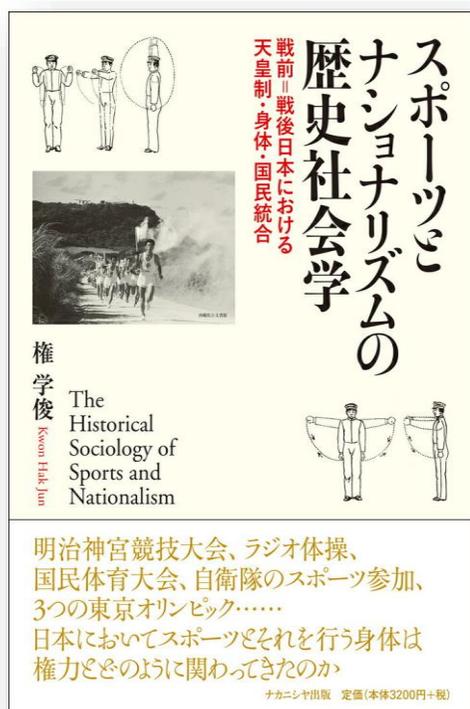
< 自著紹介 >

権学俊著『スポーツとナショナリズムの歴史社会学』

—戦前=戦後日本における天皇制・身体・国民統合』

(ナカニシヤ出版)

権 学俊



上げたい。

本書は筆者がこれまで行ってきた現代的な社会統合の一環を担うナショナリズムの機能、特にスポーツイベントを通じたナショナルな統合機能に関する論文を一冊にまとめたものである。近現代日本社会の歴史の変遷を辿りながら、スポーツとナショナリズムという問題を「天皇制」「身体規律」「国民統合」という視点から論じようとしたものであり、これらの問題を個人、全国競技会、国際競技会という三つのレベルで検討した。歴史社会学やスポーツ政策論の観点をベースとしながら、スポーツイベントが近現代日本社会や植民地であった朝鮮にいかなる影響を及ぼしたのか、また国民意識にいかなる意識を創出し、どのような「刻印」を残したのかを総合的に考察することを通して、近現代日本社会の社会的特質・構造を浮き彫りにしようと試みた。スポーツイベント

本書の出版にあたり、2020年度立命館大学産業社会学会 of 学術図書出版助成をいただいた。学会の関係各位および会員の皆さま、産社共研の皆さまにひとかたならぬお世話になった。深く感謝を申し

を伝統的共同感情の喚起、象徴儀礼論的な視角から捉えていきながらも、各時代のスポーツに含まれている歴史的意味やスポーツ史上の位置、支配と統制、同化と排除の政治力学、国民統合や大衆動員のメカニズム、植民地支配の一翼としての身体管理、都市改造・復興等々、様々な機能・役割や複雑な統合メカニズムを備えたスポーツイベントの多元性を捉えようとした。

本書は、第2部・第12章の構成からなっている。各章が一つの論文になっており、どの章から読んでも理解できるように構成を試みた。互いの章の一体感を損なわないように注意を払いつつ、近現代日本のスポーツ・ナショナリズムという問題が多角的・立体的に浮き上がるような書き方を心がけた。

第1部(第1章から第6章)「天皇制国家における大衆の国民化とスポーツ・身体」では、1880年代から1945年の敗戦を迎えるまでの戦前・戦時下のスポーツと天皇制、身体規律化について総合的に分析している。第1部では、戦前・戦時下の政治・社会を支配した絶対天皇制とスポーツとの関わり合いに焦点を当てながら、スポーツイベントの大衆的象徴儀礼が果たす国民統合の機能を考察する。近代日本における国民形成と兵式体操をは

じめ、皇室のスポーツ奨励と戦前・戦時下における明治神宮体育大会、ラジオ体操と「身体」の政治、「幻の東京オリンピック」の祝祭性と政治性、戦時下における国民体力の国家管理と健兵健民、植民地朝鮮における皇国臣民化政策と秩序化される身体について歴史の時間軸を貫いた分析を試みている。

第2部(第7章から第12章)「戦後日本におけるナショナリズムとスポーツの諸相」では、戦後初期から2020年東京オリンピック・パラリンピック大会までを対象とし、戦後日本のスポーツとナショナリズムという多面的な事象について総合的に考察した。戦後初期GHQ占領下における国民体育大会と天皇制関連の分析では、国民体育大会が象徴天皇制と関わる象徴儀礼を組み込んでいながら象徴天皇の社会的「正当性」を客観化していく過程、国民との間での儀礼的關係やパフォーマンス等を通して国民統合と地域社会統合の機会としての役割を果たしていくことについて分析を行った。また、1964年東京オリンピックと2020年東京オリンピック・パラリンピックの持つ政治性や国民統合、国家意識・国家主義の高揚を分析した。その他第二部では、高度成長期の日本社会特有の国民意識と政治性、スポ

ーツのグローバル化における国民意識を明らかにするため、戦後自衛隊のスポーツへの介入、「国民主義」が含まれており、民衆側のスポーツ・ナショナリズム運動として評価できる国民総スポーツ運動、日本スポーツにおける異質な他者と排外主義に関する分析を加えている。本書は三つの東京オリンピックの連続性を分析したが、特に2020東京オリンピック・パラリンピックがバブル崩壊後の日本社会の「閉塞感」を打破し、「日本再生」を目的としたことをはじめ、復興五輪の虚構、オリンピックテロ対策を口実にした共謀罪の政治性、オリンピックの背後に台頭する歴史修正主義を分析している。

上記の内容をまとめた本書だが、本書の特徴は、何よりも近現代日本社会における特有の国民意識を「天皇制とスポーツ」との関わりを通して抽出を試みた点であろう。また、本書は私たちの身体はただ自然的・生理学的なものではなく、歴史的なものであり社会的なものでもあるという視点から、近代的身体の歴史的な性格と身体の国民化について注目する。その中で、日本が作り出した植民地朝鮮における身体の国民化、身体と植民地支配との関係を明らかにし、身体の動員と規律が解放後の韓国社会にど

んな影響を及ぼしたのかについて分析している。さらに本書は、スポーツとナショナリズムの関係を、国家によるスポーツを通じた大衆動員、思想善導、そして国民統合という観点から国家がスポーツという手段を用い、いかに国民を操作していくか、操作しようとしていくかを検証したが、一方で、国家からの側面のみならず、民衆側の様々な意識や民衆の要求を媒介として自己表現、主体を形成する場としてのスポーツを民衆側からの観点・考察を試みている。ネーションへの統合はもっぱら「上」から押しつける形態だけでないからである。

本書で取り上げたテーマと内容が、近現代日本におけるスポーツとナショナリズムに関する全体像をすべて明確にしたわけではなく、筆者の力量不足のために必ずしも議論や考察が十分なものとはなっていない。また、スポーツを対象とした包括的かつ体系立てられた社会科学的検討課題が多く残されており、積み残した課題も少なくない。神島二郎や渡辺治の天皇制論を踏まえた近現代日本社会における地域・国民統合との接点、戦後の象徴天皇制とスポーツとの関係性を通じたナショナリズムの分析は急務であり、この課題は、政治学や

象徴天皇制論を語る上でも重要な課題といえよう。また、国家と女性の身体性、女性スポーツに向けられた視線に関する分析、グローバル化とナショナリズムなものとの間で揺らぐ外国人選手、混血選手、帰化選手など、日本スポーツ界に

おける排外主義に関しても解明すべき多くの論点も残されている。

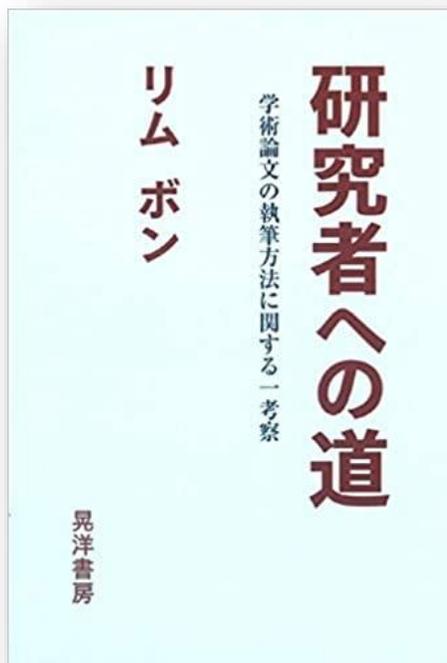
「東アジア社会論」を視野に収めた日中韓のスポーツ・ナショナリズムの比較分析も今後さらに追及されるべき論点である。

リム ボン (著)

『研究者への道－学術論文の執筆方法に関する一考察－』

(晃洋書房 2020年9月)

リム ボン



将来、立派な研究者になりたい。そのような夢と希望を抱いて大学院に進学した人がいるであろう。あるいは修士論文に着手している人もいるであろう。博士号を取得するために学会誌のレフリース付き論文にチャレンジしている人もいるであろう。みんな、ワクワクドキドキ、心躍らせて研究に取り組んでいることであろう。

他方で、どのように論文に取り組めばよいのかがわからず、不安と焦りに苛まれている大学院生もいるであろう。私（著者）も若いころは研究テーマの探し方や論文の執筆方法がわからなくて苦しんだ記憶がある。人によっては、こ

のような苦しみは生みの苦しみとして必要であるという考え方もあるが、私はそうは思わない。

そんなものは不必要な苦しみであり、時間のロスでしかない。

最悪の場合、大学院生たちの研究意欲を殺いでしまう。

「テーマが決まれば研究は 7 割終わったようなものだ！」

私が大学院生の頃、そう豪語し、大学院生たちに発破をかける先生がいた。とても心強かった。この先生について行けば研究テーマで苦労しなくてすむ。そう考えた。けれども、テーマを決める段になって「自分で考えろ」といって突き放した。私たちはガクッと躓いた。最も肝心なところではないか。ここでしっかり大学院生と向き合ってテーマを構築する作業に付き合う、それが指導教員の役割ではないか。若い頃の私はそう考えた。

あれから 30 数年の月日が経過した。お節介かもしれないが、この間に蓄積してきた技法を紹介してみようと考えた。「秘伝の伝授」、なんてカッコいいものではない。独断と偏見の押し売りだ。

本書は、これから学術研究に挑んでみようと考えている大学院生や学部学生を対象に、学術論文を成功裏に仕上げてゆくための具体

的方法を明らかにすることを目的に執筆した。

第一章では大学院生たちが指導教員を選択する際に心得ておいた方がよいと思われるポイントを具体的なエピソードを交えて紹介している。どのような人物が指導教員に相応しいのか。大学院生と指導教員、どちらも人間なので相性の問題もある。ケースバイケースなのだ。本章では、筆者が 30 数年前に実際に体験した出来事をもとに、筆者なりに考え得る理想的な指導教員像を描き出してみた。これは結構微妙で、危険で、ヤバイ話なのだ。事と次第によっては、誹謗中傷と受け取られ、名誉棄損で訴えられるかもしれない。だから、間違っても実名を登場させるわけにはいかない。なんらかの工夫を凝らさなくてはならないのである。思案の末、一つの解決方法に辿り着いた。それはフィクションを活用することである。

フィクション（小説）の技法を取り入れることで、誰も傷付けることなく、筆者なりの仮説を自由に披露することができる。公序良俗にも反しない。

「本章はフィクションであり、登場する人物や団体は架空のものである。けれども、実際にあった出来事にインスパイアされた作品で

ある」ということにしておこう。

主人公をエル君と呼ぶことにする。

本章では、エル君が学部生の頃から学問に興味を抱くようになり、大学院に進学して博士号を取得し、やがて研究者として立ち立ってゆく過程を、指導教員たちとの出会いを軸に展開する。そうすることで指導教員のあるべき姿の一端を浮き彫りにする。あくまでも小説として。

第二章では学術論文とは何か、そして独創的な学術論文はどのようにして生産されるのか、その技法を紹介している。

第三章では博士後期課程の大学院生たちが学会誌のレフリー付論文に挑戦する際の留意点を紹介している。

研究者の世界に身を投じていつの間にか 30 数年もの歳月が流れた。決して順風満帆な人生であったわけではない。トライ・アンド・エラーの繰り返しだ。もう一度研究者として生まれ変わりたいかと問われるならば、否。躊躇なくそう答えるであろう。なぜなら、研究者の生活には ON と OFF の区別がなく、仕事を忘れられる瞬間が少ないからだ。どこかへ遊びに出かけても、頭の片隅ではい

つも研究モードのスイッチが入っている。論文を執筆するのはいつも夏休みや連休などの長期休暇中だ。学期中は授業や会議で集中的に論文に取り組むのが難しい。思考の持続的集中が必要だからだ。まったくもって精神衛生上よろしくない。それでも、運よく人並みの研究業績を築き上げることができた。そのように自負している。そしてそれが可能となったのは、私の精神力が強かったからではない。学術論文を生産する上で欠くことのできない技術（テクニク）に支えられたからである。本書ではその手の内を明かすこととした。あくまでも私の個人的体験でしかないので、批判的に読んでいただきたい。もし、若い研究者たちに益するところがあれば、この上ない喜びである。

本書は立命館大学産業社会学会学術図書出版助成によって日の目を見ることができた。ここに記して謝意を表します。

※ ここで私（リム）からのお知らせです。本書「研究者への道」を先着 10 名様にプレゼントいたします。入手ご希望の方は産業社会学部共同研究室のところへ受け取りに行ってください。

< 学部共同研究会報告 >

「他領域で社会運動研究の論文を刊行するには？」

“How to publish the article of social movements in
different research areas?” 開催報告

富永 京子

【開催日時】 2021年8月11日（水）10：45～12：30

【会場】 Zoomによるウェビナー形式、要事前申し込み

【報告者】 Prof. Hsiao Yuan (The University of Washington)

【司会者】 Prof. Hsu Jen-Shuo (Hokkaido University)

Zoomにて、社会運動論・メディア論・社会ネットワーク分析を専門にされる Hsiao Yuan 先生 (The University of Washington) をお招きし、Hsu Jen-Shuo 先生 (北海道大学) をコメンテーターに、産業社会学会と国際言語文化研究所の後援のもと共同研究会「他領域で社会運動研究の論文を刊行するには？」を開催した。

社会運動研究は、社会学・政治学から地理学、人類学、教育学と言った分野まで、数多くの理論・領域に研究者がいる分野である。しかし、自身の行った社会運動の事例研究をどのように他のディシプリンに繋げてアウトプットを出すか？ということは、すでに特定分野に軸

足を置いている研究者からすると、問題意識の設定、分析枠組みの調整、あるいはジャーナルの選定といったある種些末と感じられる点に至るまで、決して簡単な問いではない。そこで本セミナーでは、メディア論で活躍されている社会運動研究者の Hsiao Yuan 氏を招聘し、ご自身の初期の研究についてのお話を伺いながら、社会運動研究における他領域との接合について英語、一部日本語で議論を行った。

参加者には、Hsiao Yuan 先生の論文 “Understanding digital natives in contentious politics: explaining the effect of social media on protest participation

through psychological incentives.” *New Media & Society* 20(9): 3457-3478, 2018. を事前に読んで頂き、その解説を先生に行って頂き、また Hsu 先生とフロアから質問を行うかたちで議論を進めた。

参加者は学内外より 24 名、また社会運動論に限らず老年社会学や社会福祉学といった分野の人々にもご参加いただき、興味深い質疑応答が繰り広げられた。社会運動論とメディア論を横断する論稿を書かれるにあたり、ミクロレベル（社会運動論）とマクロレベル（メディア論）の分析を必要とする中で重要視されたのは、社会学理論（sociological theory）と対象となるトピック（topical concerns）をそれぞれの概念を援用しつつどうつなぐか、という点だと Hsiao 先生は繰り返し強調されていた。

論文刊行のためのセミナーであるため、とりわけ査読過程やジャーナル選定についても質問が集まったが、特にジャーナルに関してはトピックベースのジャーナルを選定した際（本事例の場合、メディア関連の雑誌）という前提で報告が行われた。この場合、Referee は事例の選択に伴うセレクション・バイアスの問題には関心がなく、ジャーナルで説明すべきは社会学の理論よりもメディア論に重きが

置かれることになる。他分野の文献について知る、また、ジャーナルの選定を行うためには、継続的に連携している共同研究者の力を借りることも重要だという助言もあった。例えばメディア論のジャーナルであれば比較的新しい現象が事例として好まれたり、公衆衛生のジャーナルは実践的な示唆を含む内容が好まれたりと、それぞれの分野における好みやトレンドを把握することなども、とりわけジャーナルに掲載させる際の「コツ」として興味深かった。

フロアからの質問としては、地域やメディアによる特殊性をどう説明するか（例えば、ソーシャルメディア研究であれば「Twitter」でなく「Facebook」であることの妥当性の説明や、米国でなく台湾や東アジアを対象とする点など）があり、こうした質問に対しては、分析対象があくまでメディアや地域ではなく、社会運動にあること、また問題意識が動員メカニズムの解明にあることを強調するという方策が提案された。

さらに実践的な質問としては、リジェクトされた際の対応策といった内容にも言及が及んだ。基本的には自身にとってクリティカルであり、ファンダメンタルと考えられるコメントのみ修正し別のジ

ジャーナルに応募するというのが基本の戦略であるが、ここで Word 数制限の問題が生じてくる。Hsiao 氏は、ジャーナルに合わせて必要性の薄い部分は Appendix に落とすという対応策を取っているが、質的研究などであればまた異なる方策が必要になるだろう。再投稿するジャーナルは同領域のものが基本だが、他領域のジャーナルに投稿する際は、最初から全てリライトするという方針を取る。これは領域を問わず同意される対応策であった。

最後に、今回の研究会は、博士課程院生からポスドクといった、若手研究者が数多く質問を行った点でも非常に印象的であった。社会学／社会運動論に限らず、領域を超えた研究の発展や連携が研究の将来を担う若手研究者により着目されているということは、専門領域に閉じない未来を考える上で希望を感じる点であった。



<エッセイ>

「混迷の祭典」とメディアー 新聞やテレビは東京オリンピックをどのように扱ったのかー

有賀 郁敏

新聞への投稿

まず、以下の文章を読んでいただきたい。

五輪が始まって 4 日目を迎える。7 月 26 日付本紙朝刊は、前日金メダルに輝いた阿部兄妹の活躍を「日本武道館の表彰台の頂点を最強のきょうだい独占した」という文を用いて、1 面トップに大きく掲載した。日本の五輪史上初の快挙に感激した人々も少なくないだろう。その一方で 28 面下段の DIARY 2020+1 には「覚悟背負わされる現場」と題した小さな記事が載っている。そこでは大会指定病院の救急外来（ER）の密着取材を踏まえ、新型コロナや熱中症の対策に取り組まねばならない医療現場の苦悩が綴られている。IOC 関係者や為政者らが発する麗しくも空しい言葉と医療現場が担わねばならぬ、こうしたリ

アルな苦闘の間に大いなる矛盾と理不尽を感じないわけにはいかない。本紙 5 月 26 日の社説を読み、社会の木鐸としてのジャーナリズムのありように思考をめぐらした読者の一人として、この小さな記事に込められた大きな意味を反芻したい。なぜなら人々の命と健康にかかわることなのだから。

この文章は、7 月 26 日付『朝日新聞』の紙面構成になにほどこかの違和感を抱いた読者が同紙「声」欄に送った投書である（この投書は掲載されなかった）。投稿者は私である。どうして紙面構成に違和感を抱いたのか。もちろんかの兄妹の偉業への反感からではない。5 月 26 日の社説を念頭にジャーナリズムの矜持に思いをめぐらせたからである。

東京オリンピックと新聞報道



朝日は『信濃毎日新聞』（5月23日）、『西日本新聞』（5月25日）、『沖縄タイムス』（5月25日）より遅れて、全国紙では唯一東京五輪の中止を求める社説（「夏の東京五輪 中止の決断を首相に求める」）を掲載した（『東京新聞』も「人の命を危険にさらしてまで開催を強行することは許されない」という社説を6月1日に掲載）。私の理解では、この社説を含めて朝日は五輪終了までに五輪に関する10回程程度の社説を掲載し、そのすべてにおいて新型コロナウイルス感染拡大との関連で5月26日の社説を基調にした識見を載せている（たとえば「五輪の観客 科学置き去りの独善だ」（6月22日）、「無観客五輪 専門知、軽視の果てに」（7月10日）、「五輪きょう開会式 分断と不信、漂流する祭典」（7月23日）、

「五輪閉幕へ 問題を放置せず検証急げ」（8月7日）。

ところが五輪が開幕するやいなや、アスリートたちの活躍がメダル獲得と相まってスポーツ面とともに他の紙面を席捲しはじめたのであり、一面トップに掲載された7月26日の記事はこうした同紙のメダル偏重とも感じられる兆候を象徴するものだった（もっとも朝日は開幕日23日付朝刊で「五輪の光も影も報じる」と記しており、理屈はたっているのだろう）。私の違和感の根拠はこの点にある（この未発の投書の影響かどうか分らないが、国民の注目度からすればおそらく阿部兄妹より注目度が高いと思われる野球侍ジャパンの金メダル獲得をはじめ、朝日は五輪関連の記事を一面トップで掲載することを閉会式までしなかった）。

その朝日は8月9日付朝刊で、「東京五輪閉幕 混迷の祭典・再生めざす機に」と題する社説を掲載している。そこでは新型コロナウイルス感染拡大の只中で五輪を強行した政府、東京都そして大会組織委員会さらにはIOCの体質を含む、五輪の現状に対する批判的な言説も見受けられる。そしてアスリートたちの実践から醸し出さ

れたスポーツ的、社会的な意義にも触れて、オリンピズムの再生への期待が語られている。ついでに言えば『信濃毎日新聞』などの地方紙は、五輪問題に限らず全国紙以上にジャーナリズムとしての矜持を際立たせることがあるが、この点は各紙が直面した歴史的教訓が影響しているだろう。信毎に関しては、陸軍の逆鱗に触れ不買運動を招くことになった桐生悠々による「関東防空大演習を嗤う」（1933年8月）の顛末が、このことを雄弁に物語っている（井出孫六『抵抗の新聞人 桐生悠々』改訂版、岩波現代文庫）。



これに対して読売や産経は、政権の国策的な五輪開催への強力な思い入れに雁行するかのごとく、それを補うような記事を連日掲載した。読売が五輪開催期間中（17日間）に五輪結果を1面トップで掲載しなかったのは、「入院、重症者らに限定」の政府方針（8月2日）

を報じた時を含めて5日間だけであった（その場合でも1面のカタやハラには五輪記事が掲載され、中面には8頁に及ぶ五輪特集が組まれている）。産経は先の朝日社説に対抗したのか、「東京五輪 開催の努力をあきらめるな」と題した社説（5月28日）で政府・組織委員会を後押しし、また新型コロナウイルス感染拡大の危機的事態の中で五輪の開幕を迎えた当日（7月23日付）、「『こんな時にスポーツなんて』との批判を今も聞くが、間違っている。こんな時だからこそ、必要なのだ」という社説を掲載した。こうした事実を踏まえれば、朝日、

毎日、東京の各紙とは異なり、両紙は政府方針における翼賛的な機能を担ったとみなしても仕方ないだろう。

ちなみに、その温度差はともかく大手新聞各社が五輪開催に理解を示すのには理由がある。朝日、読売、毎日の各紙は日経とともに東京五輪のオフィシャルパートナーであり（オフィシャルサポーターまで含めると産経、北海道新聞）、五輪開催を支援する立場にある。ここにジャーナリズムの使命との軋轢はないのだろうか。「社会の公器」あるいは「社会の木鐸」として国民の知る権利を保障する観点から権力を監

視すべき新聞社が、こともあろうにグローバルパワーが交差する五輪（メガ・グローバルイベント）のスポンサーに名を連ねること自体に問題はないのだろうかという疑念である（新型コロナ禍の五輪 7 月開催に対する各紙の「判断」（無回答を含む）を紹介した『週刊ポスト』2021 年 5 月 24 日号の批評は興味深い）。

NHK の異常な放映

大手新聞の五輪報道もさることながら、NHK の五輪放映のなされかたも異常と言わざるをえない。ちなみに、NHK は 1 千時間（地上波 430 時間）（民放 500 時間）を超える五輪史上最長の TV 放映を実施している（NHK 総合、E テレ、BS1、BS4K、BS8K の計 5 チャンネル）。昭和天皇の死去に伴い、地上波のほとんどすべてが昭和天皇特集に特化した際も、教育テレビ（E テレ）だけは子ども番組などの「通常」放送を基本としていたのであり、今回の五輪偏重の放映をめぐっては、なぜ E テレまでがという違和感を持つ人々もいたであろう。

ちなみに、NHK「ニュースウオッチ 9」は大会期間中、新型コロナの新規感染者数が過去最多を更新

した日が 8 日間に及んだにもかかわらず、通常時間（1 時間）を 15 分、30 分に短縮して五輪放映に割り振っている。また、広島に原爆が投下された 8 月 6 日、例年であれば地上波で流した原爆関連の特集を 43 年ぶりに放映しなかった。ある民放報道局のプロデューサーは、「コロナの感染がこれだけ拡大する中、伝えるべきニュースが担保されなかったということ。重く受け止めて、自分たちでも検証しなくてはならない」と語っているが、見識である（『朝日新聞』2021 年 8 月 18 日付）。

海外メディアの眼差し

海外のメディアは東京オリンピックをどのように伝えたのだろうか。そのうちの幾つかを見ておこう。『ロサンジェルス・タイムス』（電子版 7 月 23 日）に掲載されたコラムでは「日本の地元の人々は五輪の価値についてすら確信をもっていないでいる」とし、「パンデミック対策ではほぼすべてにおいて失敗を重ねてきた自己本位の政府により、公共の安全が金銭上の懸念によって損なわれたとの考えが広がっている」という厳しいコメントを記している。『フランス・ルモンド』（電子版 7 月 24 日）に

は、「不安の中で五輪始まる」という特派員の記事を掲載している。もちろん、こうした記事とは反対に五輪を好意的に報じている海外メディアもあるだろう。しかし、だから相殺されてよいというのではなく、海外メディアが直視した五輪に対する問題点や課題を冷静に捉える必要があるだろう。

日本人)に関する記事等が報じられている(写真は SDZ, 20. Feb. 2021)。推察するに、新型コロナパンデミックの最中に五輪を自国で開催した際に予測される、社会の反応・ハレーションを日本の状況とリンクさせながら興味深く報じているのだろう。



メディアは何を語る(べきな)のか



ところで『南ドイツ新聞』(SDZ)は、もっとも精力的に東京オリンピックに関する記事を掲載してきた海外新聞の一つである。たとえば、大会組織員会に強い影響力をもつ電通とその元役員の五輪支配と五輪招致疑惑 (JOC 会長の突然の交代)に関する記事、森喜朗前大会組織員委員長のいわゆる女性差別発言に伴う辞任と橋本聖子会長就任に関する記事、さらには新型コロナ禍により無観客となった五輪に対し、ボーダーを超えようしない日本人気質 (状況に適合する

「多様性と調和」をスローガンに掲げた東京オリンピックの意義をめぐっては、開閉会式での IOC パッハ会長や橋本大会組織委員長の美しい挨拶は言うまでもなく、それとは反対に差別に対する抗議あるいは多様な性、マイノリティーを体現したアスリートの実践についても報じられている。この SDGs やオリンピックと通底するスポーツの社会運動としての側面がメデ

ィアを通じて広がったことは間違いない(たとえば「多様な性 五輪が示す現在地」『朝日新聞』2021年8月23日付)。こうしたことから、「東京五輪を開催してよかった」という声が生まれてくることも分からないわけではない。

しかし、この種の評価は平時の五輪においてこそ意味を持つものであり、新型コロナパンデミックという有事・非常事態に際しては評価の前提自体が欠落していると、私は考える。政府の新型コロナ分科会の尾身会長が「普通は(五輪開催)はない」と語ったが、人知が及びにくい、しかも人命を左右しかねないパンデミック下において、五輪のような人知が及ぶはずの巨大イベントは実施されてはならないのである。

五輪期間中の8月2日、首都圏をはじめ全国の医療提供体制の崩壊を前に、菅首相は「重症者リスク以外は原則自宅療養」を公言した。必要な医療を必要な時に受けらず、自宅で命を落とす人が続出している。医療提供体制が整っていたなら救えたはずの命の重み、犠牲者や家族の無念さは計り知れない。アスリートやボランティアがこの

ような事態を招いた張本人だと言うつもりなど毛頭ない。しかし、尾身会長も国会で証言しているように、五輪が緊急事態宣言下の人々の高揚感を高めたことが、結果的に感染の拡大を招いたことは疑いえない。しかも、五輪会場には多くの医師や看護師の方々が張り付いていたわけである。これらの医療関係者を新型コロナ対策に向けて集中していたならば、もしかしたら上記の痛ましい事態の何件かは生じなかったかもしれない。

五輪やパラリンピックの理念に照らしたアスリートたちのドラマを東京2020+1からアドホックに抽出することは可能であるし、そこには、その限りで、学問的な課題も存在する。しかし、そのことの強調のあまり東京2020+1に対する本源的な問いを忘れてはならないだろう。なぜならば、人命よりも大切なイベントなどこの世にないのだから。

(2021年9月8日)

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告など教育・研究に関するあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろいろな特集も組んでいきたいと思っています。

何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。

形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してください。

